

---

# ゴブリンシャーマンに召喚されたらダークエルフだった…、その後。

伊藤ナノ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ゴブリンシャーマンに召喚されたらダークエルフだった…」、その後。

### 【Zコード】

Z7959Y

### 【作者名】

伊藤ナノ

### 【あらすじ】

「ゴブリンシャーマンに召喚されたら、ダークエルフだったの後日談…、だったはずがなぜかまだ続いています…。

基本は1人称です。設定は自分でも謎です。  
練習作です、生暖かい目で見てください。

3章が終了しました。4章から宇宙編になります。

4章の投稿ペースは落ちることになりそうです…。

宇宙編は今までと設定が違いすぎるので書きづらいのです。

（）いきなり最初からチートです。チート主人公が苦手な場合はご注意ください。

俺たちは、日本の復興をするのに金が必要だった。東亜連邦共和国の一部として、復興資金を求めた。それなりの金額はでた。

軍隊も500の武装獣がいる。あの戦いで数が減ったのを補充してもらつたのだ。

軍隊の維持には金がかかるのでこれくらいが今の財政状況では一杯だ。

50機を1部隊として、10部隊を治安維持に回している。はつきり言つて足りないのだがしようがない。

武装獣がない地域での機人の来襲には、俺がサンダーボルトとギガバレットの乱れ撃ちで対応しているのが現状だ。

機人はどうやら太平洋諸島から来ているようだ。

機人がいないと魔石が取れない。東亜連邦は魔石を取るために戦闘艦を複数用意して太平洋諸島で戦つてはいるようだが、俺にはお呼びがかからない。俺が行くと機人を殲滅してしまうからだ。東亜連邦の目的は魔石の定期的な確保であつて殲滅ではない。

日本では、四国だけ機人を残して置いた。そこから飛来する機人から魔石を取るのだ。なので俺の部隊は四国周辺の地域に主に展開している。

後は地道にインフラ整備をする必要があつた。魔導機関を作成する工場を東亜連邦の協力で建築をしていった。これがないとこの世界では動力源がない。発電も魔導機関で行なつてはいるのだ。

四国周辺からインフラ整備を始めた。なぜなら武装獣の部隊を配備している治安を維持できるところがこの地域だけだからだ。

具体的には九州、中国、近畿地方が対象になる。投資する資金が限られているのだ。ここから俺とアヴェルアーカは復興の仕事を始めた。

発電所を造り道路を造り、廃墟になっていた街を作り替えていく。気の長い仕事だ。

仕事をしていくうちに俺は200才になっていた。約10年で日本にも人が住むようになっていた。冒険者には機人が必要だ。冒険者も集まってきた。ギルドも作られている。冒険者が入ればそれを当てにする商売をする人間もやってくる。

東亜連邦では主にインドネシアから魔石を取っているがそこは軍の戦闘地域だ。ヨーラシア大陸から隔てられた諸島では冒険者が行くには難しいようなのだ。

人が増えてくれば食料の確保も必要だ。農業、漁業にも投資を行つた。瀬戸内海は危険地域だが日本海なら安全だ。

これは気長に投資をしていくしかない。いつまでも東亜連邦に頼つてはいられないのだ。

更に10年が経つた。経済は順調に立ち上がっているようだ。俺は西日本での利益を東日本に当てられるようになっていた。東日本の担当はアヴェルアーカだ。アヴェルアーカも40才になっていたがまだ元気だ。だが、ロードはエルフほど長生きはできない。魔力が高いほど長生きするようだが、それでも200才が限界だろう。

更に20年が経つた。東日本の復興も順調だ。発電所も建設した。道路や街の復興も行なつていった。東京は最優先に復興した。名古屋も順調だ。元々あつた病院、学校などの福祉的な施設も次々と増やした。魔導機関による列車も次々と開通中だ。もう東亜連邦の支援はいらなくなつた。問題は俺とアヴェルアークとの間には子供はできないということが分かつたことだ。俺は人造人間ではない。どちらかと言えば人間に近いのだ。人造人間と人間の間には子供は生まれない。少し寂しいがこればかりはどうしようもない。俺たちの子供はこの日本だ。そうアヴェルアークに言つた。

更に30年が経つた。北海道を除けばほぼ復興は終わつた。北海道は観光地と漁業、農業、畜産、林業として育ててはいるがなかなか人が集まらないのだ。やはり寒いのは嫌なのだろうか。それに比べて沖縄は順調にいつている。南国は確かに魅力的だ。

それでも沖縄は赤字だ。昔の日本でも沖縄は国の補助金で賄わっていたのが大きかった。北海道と沖縄はお荷物なのだ。

俺とアヴェルアークは北海道について話しあつた。

「どうするのよ？これ以上は人は集まりそうにないわよ

「仕方がない、北海道に限つて農業と畜産の法人化を認める。人さえ集まればいいのだ。それで商業もうまくいく

「分かったわ、それしかないよつね」

これで北海道は企業による参入で回復した。

とうとう、その時がきてしまった…。アヴェルアークが倒れたのだ。もうアヴェルアークも180才だ。引退してもらつていたが、それ

でも老化ばかりは止められない……。若返りの魔法などないのだ。

「アヴェルアーカ聞こえるか？」

「聞こえるわよ、セージ」

「俺たちの子供、日本は成長した。お前は十分な仕事をしたんだ、ゆっくりしていいんだぞ」

「そうね……、ゆっくりさせてもううわ……、今まで楽しかったわ、セージ」

「まだ一緒にいよう！な？アヴェルアーカ」

「私はもう駄目みたいなの……」

「俺が回復してやる、死なせない！」

全体回復を発動した！だが、探知で俺は分かっていた。アヴェルアーカへの探知が弱っている。もうじき死ぬと……。

「俺もアヴェルアーカとして楽しかった！アヴェルアーカがいたからこの世界で生きていくと想つたんだ」

「あ……り……が……と……う……」

アヴェルアーカは息を引き取ったのだ……。

「アヴェルアーカ！……！」

俺は泣いた。涙が止まらなかつた。

それからの俺は魂が抜けたようだつた。仕事をする氣にもならなかつた。もう俺がやらなくて済む日本の運営は回るようになつてゐる。

俺はなんのためにここにいるのか分からなくなつたのだ。

自然と足がモスコーザヴィアに向かつてゐた。そう魔導研究所だ。

「英雄がこちらへなんの御用でしようか?」

「JINの所長のヴァスカーヴィルとこちらしい。

「以前、俺はJINで召喚魔術の方法を伝えた、それについて情報共有したい」

「分かりました。付いてきて下さい」

俺は魔導研究所の召喚魔術の研究所に足を踏み入れた。

そこにはあの魔方陣が完成していたのだ。JINには6人いた。

一々、聞いて教わる必要などない。俺はそこにいる全員の意識を順々に奪つて次々と知識を奪つていた。

どうやら、召喚魔術は完成に近づいてゐるらしい。発動のキーがあ

と一歩足らないのだ。

俺はそれがなにか分かっていた。前の世界の魔導院の資料室で俺が知った知識の一つを埋め込めばいいのだ。

そして、今どこかで召喚術が発動する気配を観測していることも奪った知識で分かった。

どこかの異世界からこの世界の人間を召喚しようとしているのだ。

俺は魔方陣の中に立つて、詠唱を開始した。その召喚とこの魔方陣を繋ぐのだ。

魔法は発動した。俺は光に包まれそしてこの世界から消えた。

## 後日談（後書き）

これが後日談です。4章ルートが開いていますが、無理っぽいです。  
⋮。

## 第1話 スレイブ二郎

俺は地球に戻っていた。元の魔導研究所の魔方陣に召喚されたのだ。

話せば長くなるが俺は召喚魔法で異世界に行っていた。

その世界で倒せば不老不死になるという巨大な龍と戦っていたのだ。ギガデストロイを86発撃つたところで戦いは終わった。不老不死になれる龍だけあって回復力が並じやなかつた。龍の攻撃も並じやなかつたが、それを凌いで倒したところで俺は不老不死になつた。そこでここに召喚された。今までにない熱い戦いだったのだ。まあいい。

モスコーヴィアは俺を呼びだそうとしたに違いないなぜだ？

「伝説の英雄を召喚できた！伝承通りの黒いエルフだ！」

なにやら喜び合つている。抱き合つている奴もいる。

「俺になんの用だ？」

「伝説の英雄にこの世界を救つて欲しいのです！」

機人はあらかた片付けたはずだが、盛り返してきたのか？

「どこの地域で機人と戦つているんだ？」

「火星と木星の間にあるアステロイドベルトで機人と遭遇したのです！」

「はあ？、意味が分からん！」

「どうやら、ここは俺が機人と戦った世界よりさらに500年進んだ世界らしい。

つまり俺が生まれた世界より1000年後だ。

人類は火星をテラフォーミングしている最中で、そこにドーム造り、生活をしているものも出てきているらしい。

魔石を人工的に生み出せるようになつて地球から機人は掃討されたようだ。

人類はそこで宇宙に踏み出しのだ。月面にドームを作つて生活を始め、火星の改良を行つた。

そこからアステロイドベルトの小惑星ケレスを足場に木星へと手を伸ばしたところで機人と再び遭遇したらしい。

モスクーヴィアは俺が知つていているよりさらに高いビル群が並んでいた。その間をチューブが通つておりそれが列車のようなものらしい。某レンズを腕に嵌めた某銀河パトロール達が戦つた未来のような光景だ。

燃料を宇宙から確保できたので急速に発展したらしい。

とりあえず、聞いてみた。

「宇宙で機人と何に乗つて戦つているんだ？」

「バトルシップです」

うん、全く想像が付かない。

俺は实物を見るために、地球の宇宙ステーションへと昇ることになった。これは地表から宇宙までの伸びる広大なエレベータみたいなものだつた。軌道エレベータといつらしい。宇宙からの物資の搬入も行つたためにこのような大きさになつたといつことらしい。

その宇宙ステーションで最新鋭のバトルシップを見た。

4機の重水素による核融合ジェネレータを搭載し、艦首に主砲、両サイドに4門づつの長距離砲を積んだ化け物だ。

さらに魔導機関も備えているらしい。このバトルシップはスレイプニルと呼ばれている。

大きさは500mにもなり、ジェネレータにより攻撃はレーザーを撃つ。防御にはジェネレータによるエネルギー・シールドを4つまで展開する。移動にはジェネレータによる推進力と魔導機関によるワープを持っているそうだ。

魔導機関をメイン動力にしないのはジャマーを無効にするために開発された機体だからだ。それに魔導機関ではエネルギーが足りないということもある。

俺のレベルは異世界で420まで達したがそんな問題じゃない。攻撃魔法撃つより強力なんじゃね？、これ。

俺は上級魔法を1100発、最上級魔法を550発、超上級魔法を225発は撃てるがそんなもんじゃねー。

## 第1話 スレイプニル（後書き）

4章がはじまりましたが、宇宙編です…。自分もびっくりでした…。

## 第2話 アステロイドベルト

「相手の機人はどのくらいの大きさなんだ？」

「これで戦う機人ってヤバすぎるだろ。」

「エクスシアで1キロ、デュナメスで2・5キロ、ドミニオンで5キロといった大きさです」

「5キロの敵ってなんだよ。エナジーサークル真っ白じゃね。それを超えてるだろ。」

「機人の攻撃はなんなんだ？」

「レーザーをがんがん撃つてきます」

「いや、5キロの敵のレーザーって某波動砲じゃねーのか？本当にこのシールドで耐えられるのか？」

「俺の持つ最大級防御魔法インビンシブルでも耐えられないんじゃねーのか？」

バレットでは全く効かないだろ？といつが射程が足らない。俺の開発した実弾系超上級攻撃魔法スーパー・マーピアッシング（超徹甲弾）かスーパー・バレット（超貫通弾）でも効くかどうかは分からぬ……。」

「ではさつそく乗つて貰います、これで最前線基地ケレスまで行つて貰います」

いや、俺つてさ、宇宙戦闘機って乗ったことないのよ。まじで無理だつて。

「乗り方教えてくれないと行けねーよ」

「メインスクリーンは戦闘用です。サブスクリーンがワープ用です。魔導機関により操縦は魔力で動きます。基本は武装獣でしたか、あなたが乗っていた機体と似ています」

簡単な説明ありがとうございました。わからねーっつーの。俺はスレイプニルに乗せられた。

トリガーのハンドルは3つある。2つは主砲と副砲とシールド。右のトリガーの上のボタンを主砲になるらしい。シールドは左のトリガーの上に4つボタンがある。ワープは真ん中のトリガーのボタンらしい。

「ワープする時にはサブモニターで移動先を探して真ん中のトリガーを引いてください。」

そして、俺は魔力を出して発進した。大丈夫なのか、俺…。

サブモニターを見る。くるくる座標が変わる。そして火星の次に小惑星が写った。これが目的地のケレスだろう。

俺はワープボタンを押した。一気に体が持つて行かれる！体にGがかかったようだ。どのくらいこのまま続くんだ？

数十秒だろうか。俺は最前線の小惑星ケレス付近の宇宙空間にいる。

やはり、宇宙は広いなあと素朴な感慨に浸っていた時だ。

なんか来た、1キロはある機人だ。これがエクスシアってやつだろ  
う。

俺はいきなり戦闘を開始することになった。

いきなりレーザーを撃つてきた。俺はシールドのボタンを押した！  
これで防げるのか？

どうやら耐えているようだ。スーパーバレットを機人のエナジーサ  
ークルへと連射する。

3発で沈んだ…。弱いじやねーか、びびらせんなよ。

なんか俺の周りにエクスシアが集まってきた。ちょっと待てーいき  
なりでそれはないだろ。

6機もいる。俺はシールドを4つ展開しながらスーパーバレットを  
撃ちこんで全機沈めた。

とりあえず、ケレスとやらに行かなくては戦いが続いてしまう。俺  
はバトルシップを飛ばした。

ケレス付近で交信がきた。

「こちらは小惑星基地ケレス、そちらの所属を教えて下さーい」

「俺はセージ、伝説の英雄だ」

「お待ちしておつました。着陸を許可します

「どこに降りるんだ？」

「信号を発光していますのでそれに続いて進んで下さい」

たしかに光の点が両側に続いている。この真中を進めてことか

俺はケレスに着陸した。

「私がここに司令官のヴァルガルだ、君が伝説の英雄か、待つていたよ。君の活躍に期待している」

「活躍たって、ここは宇宙だ、勝手が違う。まず状況を教えてくれるの」

「機人はアステロイドベルトの軌道上にいる。それを排除する必要があるのだ」

「アステロイドベルトと言つたって広いだろ」

「機人との前線は8つある。まずこの小惑星ケレスの防衛、それとフローラ、テミス、エオス、ニサ、エウノミア、コロニス、ベスターだ」

「ここでは俺の超上級攻撃魔法ギガサンダーボルトが効かないんだぞ。雲がないからな」

ギガサンダーボルトは高速で雲を集め雷の雨を降らせる魔法だ。地道に叩くしかないようだ。それに俺の探知は3・2キロで宇宙ではまったく使えない。

「君には実弾系攻撃魔法があるそうじゃないか、それで機人を倒してくれればいい」

超上級の実弾系攻撃魔法は2つしかないんだよ！スーパーアーマーピアッキング（超徹甲弾）かスーパーバレット（超貫通弾）だ。

「分かった、俺はどこで戦えばいいんだ？」

「フローラでまず戦つて貰う、アステロイドベルトの戦線の一つだ。まずその機人を片付けてくれ

「とりあえず戦つてみるわ

俺はフローラで戦つていた。まだミニーライオンは見ていない。やつはどこにいるんだ？スーパーバレットを撃ちながら戦つていた。真面目な話、シールド展開中は主砲も副砲も撃てないのだ。効率的に反撃するには実弾系魔法しかない。

だいたい機人はどこからやってきてるんだ？いくら倒しても数が減った気がしない。ちなみに俺のレベルもあがらない。

### 第3話 機人の正体

俺は小惑星ケレスに戻っていた。

「君の活躍は聞いた。さすが伝説の英雄だと噂になっているようだな」

ヴァルガルが待っていた。

「機人をいくら倒しても湧いてくるんだよ、これじゃキリがねーよ

「そりなのだ、過去の記録では機人はマザーシップというもので新しく現れたと聞いているが、ここではいくら倒しても機人が減らないのだ」

なんという無限ループな戦闘だよ。これは聞いていない。

「どこから現れるとか分からぬのか？」

「それが掴めないからこちらも苦労しているんだ」

不毛な議論だつた。

「とりあえず、戦闘を続けてくれ。戦線を維持するしかないのだ

「わかったよ、戦えばいいんだろ」

まあ、武装獣のキャノン砲と違つてレーザーは無限に撃てるのが救いだ。あまり使ってないけど…。

「次はどこで戦えばいいんだ？」

「バトルシップはエウノニアを抑えるので一杯で他の戦線が手薄になっているんだ、そこをフォローしてくれ」

“うやうやしく、Hウノニアは相当激戦地域のようだ。

結局、俺はまたフローラの戦線に戻つていった。

やはり、きりがないのだ。機人をいくら倒してもすぐまた現れる。どうなつてゐるんだ？

地球ではこんなことはなかつたのだ。

この謎が解けない限り、戦闘は終わらないだろう。

そこで戦いを始めてから3週間田でドミニオンを見つけた。戦いながらドミニオンに接近した時に違和感を感じたのだ。  
機械の意識じゃない？俺は意識を奪つた。そして知つたのだ、機人の正体を…。

### 第3話 機人の正体（後書き）

変なところで展開が変わったので今回は短いです…

## 第4話 トロヤ群

機人は、宇宙人だった。本拠地は木星の軌道上の小惑星の集まりトロヤ群と呼ばれる中に存在する。地球に1000年前から侵略を開始した。そうあのスコーピオンを始めとした機人だ。それを駆逐されたためトロヤ群から乗り出したのだ。

そこでアステロイドベルトでの戦闘になつたということらしい。

宇宙人はアルファ・ケンタウリ恒星系からやつてきた。故郷の惑星がすでに住めなくなつていたのだ。魔力の強い惑星だつたがやがてそれが濃くなつていつたのだ。魔力はやがて魔障となり、魔障に侵された宇宙人は魔物になつてしまつた。それで惑星を捨てたらしい。近くの居住可能な惑星を探した。それが地球だ。その侵略のためにトロヤ群にコロニーという擬似惑星を造り住んでいるらしい。

俺は捕まえたドミニオンから宇宙人を引っ張り出しケレスにワープした。

「俺はセージだ。宇宙人のパイロットを捕獲した

「本当なの？着陸を許可する」

俺のスレイプニルはケレスに着陸した。

「宇宙人を捕獲したと聞いたが、本当なのか？」

「こいつが宇宙人だ」

「こいつが宇宙人だ」

「機人に宇宙人がいるというのは始めて聞いたが、実物が目の前にいるのでは信用するしかないな」

「まず、機人はいくら倒しても減らない、生産拠点があるんだ」

「それも新しい情報だ!、その拠点はどこにあるんだ!?」

「ヒウノニアだ、そこにある」

「だが、そこは最も防御が厚い戦線だ、制圧するには戦力が足らない。他の戦線も維持しなければならないのだ。戦線を突破されれば火星が危ない。火星は既に人類の居住地となっているんだよ」

「どのくらいで戦力が揃うんだ?」

「半年は待つてくれ、兵とバトルシップを準備する必要がある

「それと宇宙人の本拠地が分かつた」

「それはどこにあるんだ!?」

「木星の衛星軌道上にあるトロヤ群の中だ、そこに宇宙人が造った人工惑星がある」

「だが、まだそこまでは行けない。先にアステロイドベルトを全て制圧する必要がある。攻勢に出るにはそれが必要なんだ。まずはヒュノニアの制圧だ。次に8つの拠点から全ての機人を排除しなければならない。アステロイドベルトの安全の確保が先だ」

「分かつた、まずは戦力を揃えるところからだな」

バトルシップのワープを発動させるにはある一定以上の魔力が必要だ。それを満たすものを焼き集めるのだ。幸い、機人との長い戦いで人類の魔力は高まっていた。それ程難しい話ではない。

「君にはエウノミアに行つてもう。戦力が揃つまでそこを抑えていてくれ」

俺は激戦地帯のエウノミアで戦うことになった。ここに戦線を半年間維持する必要があるのだ。

俺の戦いは始まった。この巨大な戦闘機は補給を気にする必要は当分ない。重水素の燃料は4年は持つのだ。

空気は魔導機関によつて生成される。食料はエアチューブから補給する。味気ない液体食料だ。

俺はシールドを展開しながらスーパーバレットを撃ちこみ続ける。敵を次々と沈めていく。俺は3機のドミニオンの意識を奪つてそれを盾にしながら戦いを続ける。盾を失うと次のドミニオンを捕まる。ドミニオンの火力でエクスシア、デュナメスを沈めていく。ドミニオン相手でも4対1だ。そうそう負けることはない。

ひたすら戦い続けた。さすがに睡眠を取るときだけケレスに戻る。激戦地帯のエウノミアで睡眠を取れる場所はないのだ。空域全部が戦線だからだ。

そんな戦いを半年続け、やつとバトルシップが集まつた。スレイプニルの他にも重武装バトルシップもいる。主砲を2門と長距離砲を16門を積んだレーヴァテインだ。大きさは500mと変わらないが幅が400m近くある。砲門のハリネズミのようなバトルシップだ。シールドも展開可能だ。武装獣で言えばヴァラーハみたいなも

んだる。

## 第5話 エウノミアの戦い

いよいよ、エウノミアを攻略する時が来たのだ。他の7つの戦線はひたすら防御を敷くしかなくなるのが欠点だ。ただ、エウノミアを落とせば他の戦線も落ちて行くのは時間の問題なのだ。

戦いの火蓋は切られた。スレイプニルが突撃していく。後衛のレーヴァテインがレーザーを撃ちまくる。俺もスレイプニルに乗つて突撃していく。俺達は機人を倒していく。脱落するものもいるが構わず突き進むしかない。

やがて、ドミニオンよりも巨大な機人がいた。スローネと名付けられた。10キロにも及ぶ機人だ。

俺はスローネにスーパーバレットを撃ちまくつた。手数で勝負するしかない。レーヴァテインも攻撃している。やがて沈むスローネが出てきた。このまま押し込むしかない。逆に圧されれば戦線は崩壊するだろう。

このままスローネの壁を突き破るしかないのだ。スローネの攻撃に脱落していくバトルシップが出てきたが、それでも攻撃を続けた。次第に壁が崩れてきた。希望が見えてきたのだ。スローネに攻撃を集中していく。壁を剥がしていくのだ。

やがて壁に穴が空いた。だが、そこに突き進む訳にはいかない。四方から集中砲火を浴びるだろう。

スローネを駆逐するしかないのだ。やがてスローネは全滅したが、こちらもかなりの被害を出している。3割のバトルシップは失っただろう。だが、エウノミアはもつ目の前なのだ。

俺達の目的はエウノミアの生産拠点の殲滅だ。俺はエウノミアに飛び込んだ。拠点が見えた！重力系超々上級攻撃魔法「ラックホール」を撃ちまくつた。拠点が破壊されていく。機人達は最後の抵抗を見せているが他のバトルシップに任せて俺はシールドを張りながらブラックホールを撃ちまくる。やがて生産拠点はすべてブラックホールで破壊した。これでアステロイドベルトでの勝利は掴んだ。これで他の7つの戦線もやがて終息していくだろう。機人はもう増えないのだ。

戦いが終わると損害の数が分かつた。最終的に6割のバトルシップが破壊された。スローネがいなくともここは最大の激戦地帯だつたのだ。補充をしながら残り7つの戦線を制圧しなければならなくなつた。

俺はケレスに戻つた。

「おめでとう、エウノミアは制圧できた。だが、損害が大きすぎる。これでは残りの戦線を制圧する戦力が足りないので」

ヴァルガルは困った顔をしていた。

「どのくらいで戦力は回復するんだ？」

「また半年はかかる…。それまでは今の戦力で戦うしかない」

「時間が経てば、機人は新しい生産拠点を作つてしまつぞ」

「防御力の弱いところから制圧していくしかないだろう、まずはフォーネだ」

「まあ、そうするしかないだろうな」

俺達の次の目標はフローネの制圧になった。ここにはスローネがない。そして機人は補充されないので。

ひたすら、機人を沈めていく戦いが始まった。なにしろ戦力が揃っていない。戦線を少しずつ押し上げていくしかないのだ。フローネの機人を全て沈めるのに2ヶ月がかかった。その間にもバトルシップは補充されている。

いつ機人に生産拠点を作られるか分からぬ。すぐに次の攻略目標ベスターに移った。ここも2ヶ月で制圧した。そしてバトルシップもまた補充された。そして全てのアステロイドベルトの拠点を落とすのに1年かかった。結局、新しい生産拠点は作られなかつたのだ。

俺は戦闘も終わつたので小惑星ケレスに戻つた。

「君の情報のおかげでアステロイドベルトは制圧できた、やはり伝説の英雄に来て貰つたかいがあつたよ」

「戦力はどのくらい戻つたんだ？俺の感じでは減つてはいなが増えたとも思えない」

「アステロイドベルトを制圧するので消耗したのだが、補充はしたが今の戦力はエウノニア攻略直後くらいでしかない」

「次の宇宙人の本拠地はもっと防御が堅いぞ、エウノニアの防御力をさらに上回つていいんだ」

「どのくらいの戦力がいるんだね？」

「捕獲した宇宙人の情報から言えば、エウノミアに投入した戦力の3倍は必要だ、あそこにはスローネもいるんだ」

「そこまで戦力をあげるには1年は必要になるな」

「あまり時間をかけると敵も戦力を増やすかも知れないぞ」

「偵察隊を出す必要があるな、正確な場所は君しか知らない。参加してくれ」

「分かったよ、いくよ」

俺は500のバトルシップと共に木星の軌道上にあるトロヤ群にある宇宙人の本拠地に向かうことになった。

## 第6話 偵察

俺達はまず機人が哨戒していると想定されるエリアの少し離れたところにワープした。

「Jにが目的地だね、セージ」

この部隊長のヴァニッシュといつヴァンパイアだ。

「Jの前方に向かえば宇宙人の哨戒域に近づく、本拠地はもつと奥だ」

「つまりそこを突破しないと本拠地には近づけないとこJとか」

「そつなるな、Jのエリアにどのくらいの機人がいるかまでは分からぬいんだ」

俺達は進んでいくと機人と遭遇することになった。

戦いが始まった。すぐに殲滅したが、まもなくここに機人が集まつてくるだろう。

「ヴァニッシュ、Jにいたら機人が集まつてくる。すぐに移動する必要がある」

「分かった、全軍移動するぞ」

俺達は哨戒域を戦闘しながら進んでいくがどんどん機人の数が増えしていく。

このままでは偵察隊は本拠地まで辿りつけないだろう。かと言つて

本拠地に直接ワープして機人の群れに集中砲火されるのは勘弁だ。

膠着状態に陥つたところで既に機人の本拠地は見えていた。かなり遠いが今の技術ならこれで戦力が分かるのか？

「ヴァニッシュ、本拠地は既に見えた。そちらからも確認できるか？」

「前方の金属でできた丸い球体だろう。目立つから分かる、今情報を集めている。もうしばらく耐えて欲しい」

「敵の生産拠点はあの球体だ。あの中にも機人はいるはずだ」

「そこまでは確認できないな、周辺の情報を集めるしかない」

しかし、このまま戦つっていても機人は増えるばかりだ。そう持たないだろう。

「ヴァニッシュ、もう撤退しないとヤバイ。機人の攻撃が激しくなつてきた。防御するので手一杯だ」

「分かつた。情報は集まつた。全軍ワープで小惑星ケレスまで戻るぞ！」

俺達は小惑星ケレスに戻つてきたのだ。暇つぶしをしていると呼び出された。ここでは双剣で稽古をつける相手もない。

「偵察、」苦労だつた、敵の戦力がだいたい分かつた

ヴァルガルだ。情報分析に時間がかかつたようだ。

「敵の戦力は想定通りですかね」

「それが球体の中までは分からぬ。エウノニアに投入した時の2倍以上は必要なのは分かつた。安全を考えれば3倍以上の戦力が必要になるだらうな」

「宇宙人は既にこちらが本拠地を突き止めたことを知つた。さらに戦力は増強されるんじやないか?」

「だらうな、偵察はもう少し遅らせればよかつたか?」

「俺は安全を見て4倍は必要になつたと思つ」

「それほどの数を揃えるのには時間がかかるのだ」

「安全マージンをどれだけ取るかはヴァルガルに任せますよ

」結局、ヴァルガルは1年で4倍の戦力を集めることにしたようだ。かなり無理があるらしいようで頭を抱えている。

俺はそれから1年遊びたかったが、アステロイドベルトへの機人の侵入に備えて哨戒する任務についた。

なにごともなく任務は終わつた。恐らく宇宙人は侵略よりも防御を優先していると思われる。やつかいだ。

戦いを始めるにあたつてまず偵察隊を出すことになつた。既に本拠地の位置は分かつてるので俺は付いて行かなかつた。

偵察の結果、ヴァルガルはやはり4倍の戦力が必要になつたと言つていた。それを1年で揃えたのだ。

## 第7話 最後の戦い

戦闘が始まった。まずはトロヤ群への各部隊のワープからだ。密集度が高いワープは危険なのだ。

一応安全策をワープの魔法にはとつてはあるが、危険があることは避けたほうがいい。

次々と4万ものバトルシップがワープしていく。

これが機人との最後の戦いになるのだ。

4万ものワープで4日を要した。後は、集結ポイントへ集まるこことだ。哨戒している機人との戦闘は集結してからの方が効率がいい。

俺はヴァーツシュの部隊に組み込まれた。俺に課せられた目的は宇宙人の拠点、金属の球体の破壊だ。

あの球体さえ破壊すれば、宇宙人の勢力は瓦解するのだ。

全部隊が集結。ポイントに集まるのに2日を要した。宇宙は広いのだ。ワープで移動した後はジェネレータによる推進力で移動しなければならない。

さあ、戦闘が始まる。哨戒する機人を掃討しながら本隊が進んでいくと機人の群れが立ちふさがった。意地でも球体には近づけさせないようだ。スローネもいる。ドミニオンと違つてスローネには宇宙人が乗つていないのだ。やつかいな敵だ。

俺はスローネに対して意識を奪つたドミニオン3機を前衛に立てて

攻撃した。他のエクスシアとデュナメス、ドミニオンは他の部隊に任せた。俺はスローネに集中した。こいつの壁を突破するのが大変なのだ。

地味に長い戦いが続く。スローネの数はエウノニアのそれを越えている。スローネのレーザーを強引に潜りながらドミニオンのレーザーを叩きつける。俺もスーパーバレットやレーザーを撃ちこんでは、シールドを展開するという戦いを繰り返した。前衛のドミニオンが沈むと他のドミニオンの意識を奪う。いつ終わるとも知れない戦いを続けた。

1週間ものスローネとの戦いでようやく壁が崩れてきた。気づくとヴァニッシュの部隊は瓦解していた。それ程、ここに戦場は激しかったのだ。俺は一人でも戦い続けた。他にも部隊はいるのだ。戦い続けるしかない。

2週間でスローネの壁に穴が空いてきた。もう少しでここを突破できる。だが、敵も必死だ。ここを抜かれれば宇宙人は滅びるのだ。戦いは激しさを増していった。

3週間でスローネが一気に崩れた。ここを突破できるのだ。俺は球体に向かつた。そこで見たのだ。新型機人を。

宇宙人はこの1年で新しい機人を造った。全長20キロにもなる超巨大機人セラフだ。もうどこを突つ込めばいいか分からぬほどの大さだ。シールドを張りながら意識を奪えるかに賭けた。意識を奪えた！ 宇宙人が乗つてているのだ。

セラフを3機捕まえた。全部で30機しかセラフは作られなかつたようだ。球体を防衛する最後の盾だろう。

セラフを前衛にしながら他のセラフと戦う。正直な話、意識を奪えなかつたら逃げようかと思つたくらいだ。

セラフとセラフの戦いは敵に軍配が上がつた。すぐに沈んだ。新しいセラフを奪つた。沈む。繰り返しだ。

セラフの攻撃は巨大レーザーだ。シールドが軋んだ。俺は最大防御魔法インビンシブルを並行展開した。これとシールドの複合防御で耐えるしかない。そして、セラフに接近し意識を奪うのだ。俺が力尽きるのが先かセラフが全滅するのが先かの戦いになつた。普通のバトルシップは沈んでいった。やがて全てのセラフが沈んだ。俺が勝つたのだ！

俺は球体に重力系超々上級攻撃魔法ブラックホールを撃ち込んだ。これが俺の持つ最強の魔法だ。球体に穴が開く。球体全てを消してやる！ブラックホールで球体を消していく。やがて球体は跡形もなく消えた。

球体が消えると戦場にいたドミニオンは撤退していった。できれば全てのドミニオンを殲滅したいが宇宙ではギガデストロイは発動しない。残つたエクスシアとデュナメスを片付ける仕事が残つた。

戦いが終わつてみると1万6千のバトルシップが残つた。6割のバトルシップを失つたのだ。

宇宙人の本拠地は潰したが、ドミニオンに乗つた宇宙人には逃げられてしまつた。

このままでは残つた宇宙人がどれだけいるか分からぬが、再興する可能性がある。

この戦いが終わったらまた異世界に行こうと思つていたがやっかいなことになってしまった。

当分、俺はこの世界で宇宙人からの侵攻に備えていなければならぬのだ。

俺の今回の仕事は終わつたが、しばらくは暇を持て余しそうだ。宇宙中を廻る旅をして暇を潰そう。

俺は不老不死だ。時間ならいくらでも待てるのだ。

## 第7話 最後の戦い（後書き）

長い間お付き合いいただきありがとうございました。  
これで4章は終わりました…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7959y/>

---

ゴブリンシャーマンに召喚されたらダークエルフだった…、その後。

2011年11月26日19時47分発行